令和６年１月16日移動教育委員会・協議記録

グループ１

〇学校運営協議会の取組や、来年度に向けた課題について

（参加者）令和３年度にコミュニティ・スクールを設置した。学校運営協議会では、校則、交通安全、職場体験をテーマに熟議をした。学校支援コーディネーターを中心に職業体験場所を開拓した。

（参加者）令和２年度にコミュニティ・スクールを設置した。学校運営協議会では、学校運営方針や防災について熟議をした。令和４年５月には、「防災宿泊訓練のもち方について」話し合い、地域と一体になった防災訓練、炊き出し訓練につながった。訓練では、食器の代わりにちらしやビニル袋を使用するなどの取組を行った。子供の振り返りが今後の課題である。

（参加者）令和５年度にコミュニティ・スクールを設置した。立上げそのものが課題であった。地域からは、子供たちのために地域と学校が協力するコミュニティ・スクールであることが期待されている。今年度は学校支援コーディネーターが不在であったため、今後どのように選任するかについて話し合った。

（参加者）令和４年度にコミュニティ・スクールを設置した。人材や施設など素材が豊富である。小中一貫校となり、今は基礎固めの段階である。熟議の方法を工夫することで、誰もがものを言えるコミュニティ・スクール、地域の学校にしていくことができればと思う。３年間のスパンでコミュニティ・スクールを捉えて、取り組んでいる。

（参加者）地域が協力的で、学校のやりたいことを地域が理解して協力してくれる。一方で地域の思いが強すぎることが学校の負担になることもある。また、学校評価アンケートの内容に基づき、熟議のテーマを設定している。

（参加者）安全・安心な学校づくりをテーマに熟議に取り組んだ。６月の大雨で発生した土砂崩れがきっかけとなり、学校で被災した際の垂直避難や、地域の地理や歴史を知る機会となった。

（参加者）教員の校内研修に学校運営協議会委員が参加して、学校運営協議会を開催した。会議では、学校の特色や学校教育目標、校則について話し合った。学校運営協議会委員から子供の意見を尊重してほしいという発言があり、会議には、教職員、学校運営

協議会委員のほか、子供も参加した。

（参加者）令和４年度にコミュニティ・スクールを設置した。熟議のテーマは、アフターコロナの学校の教育活動の在り方、持続可能なＰＴＡ活動の在り方についてである。

（教育長）各学校の熟議のテーマを聞いて、こうした話合いは、コミュニティ・スクールがなくてもできたのか、コミュニティ・スクールの仕組みがあるからできるのか、どう考えるか。

（参加者）学校運営協議会は、学校評議員制度より、校長の学校運営を後押しするものであると感じる。

（教育長）校長の学校運営方針に対してどのような意見があるか。

（参加者）年度末に次年度の学校運営について提案をした際は、意見をいただくため、それは受け止めて再考している。

（参加者）学校評議員会の時よりも、意見の量が多く、意見の視点も多岐にわたっている。例えば、ＩＣＴの活用について話し合ったとき、活用そのものだけでなく、家庭環境（Ｗｉ－ｆｉ）や不登校支援、発達課題との関連などについても意見があった。

（参加者）コミュニティ・スクールという仕組みがなくてもできた話し合いなのかもしれないが、地域や保護者と学校が足並みを揃えるという意味で意味があると思う。

（教育長）既存の制度や仕組みにコミュニティ・スクールをどう絡めるかという視点は大切である。学校運営のために、子供のためにコミュニティ・スクールをどう生かすかという視点をもって取り組んでいただきたい。

（参加者）学校のために学校運営協議会に何かをやってもらうのではない。今は熟議のテーマを学校が考えることが多いが、それを変えていきたい。

（参加者）年間指導計画は活動をしていく中で変わっていくべきだと思う。話し合っているうちに、やりたいこと、やった方がいいことがどんどん出てくるような学校運営協議会にしたい。

グループ２

〇学校運営協議会の取組について

（参加者）学校運営協議会へ補佐的な役割として参加している。今後の支援活動について委員それぞれの立場からどのような関わりが出来るか等について、直径１ｍほどの円形ボード「えんたくん」に書き込む方法を取り入れている。地域に関わる活動への参加率が低いという課題があり、その解決に向けて、子供中心の内容に改善していくことなどについて熟議を行った。また、面接練習などにも関わっていただいているが、より活発化することなどについても協議した。

（参加者）今後の支援活動について協議した。昨年度から学校運営協議会を設置したが、あまり活動事例がないまま終えてしまった。今年度は、具体的な支援活動について協議を深めるよう取り組んできた。家庭科のボランティアを開始したほか、交通見守りや、挨拶に関する中学校との連携、市の見守りボランティアの参画などについて協議した。学校からは、全国学調の結果やキャリア教育に関する紹介などについて情報共有を図った。

（参加者）学校運営協議会を設置して４年目となる。当初は運営協議会委員と学校評議員が重複した感じだったが、会を重ねるうちに学校運営について活発に意見をいただけるようになった。学力の向上をはじめ、地域とのつながりやいじめ等に起因した子供の孤立などへの対応など意見をいただいた。民生委員の方からは、昼休みの見守り活動をやっていくことについて意見が出された。算数ボランティアについては、元教員の方が何名か集まってくれた。

（参加者）外国につながる生徒が多いことから、その子供たちへの支援について小学校の取組（放課後の勉強会）を参考にしながら１学期に協議を行い、２学期から運用を開始した。どう継続させていくかが大切であり、地域の関わりが重要であるとの意見が出された。本校においても面接練習には、委員２名から協力をいただいている。いじめ問題への対応についても熟議している。

（安田委員）ある中学校では、以前から面接練習や家庭科の調理実習は地域の方が支援してくれたと聞いた。防災に関する講座についても、地域の方が指導をしてくれていたようである。

（参加者）キャリア教育への理解やキャリア・パスポートについて説明し、本校のキャリア教育をもとに子供たちをどう育てるかを熟議した。協議の観点を定めてグループ協

議を行い、地域人材の発掘、大学との連携など、地域の方から様々なご意見をいただくことが出来た。授業で必要な支援を協議する中で、ミシンボランティアや調理実習補助、安全見守りボランティアなど、学校の教育活動へ地域の方が支援いただき充実したものとなっている。継続していくために、委員の方が地域人材をリスト化し、学年の活動ごとにまとめてくれている。

（参加者）昨年度の取組をコミュニティ・スクールディレクターがまとめて第１回の協議会で配付した。コミスクだよりも発行しており、学校応援ボランティアを募集したところ、登録人数が 100 人程度いる。ボランティア同士が連絡を取り合えるようになっていて、希望する方が支援に来てくれている仕組みとなっている。９つあるクラブ活動のうち８つは地域の方が講師を務めてくれており、教員は関わっていない。子供たちは、日常的に学校の教員以外の大人が教えてくれる環境に慣れている。４回協議会を開催しており、学校運営基本方針の承認をはじめ、本校のキャリア教育の説明と授業参観、学校支援から協働へという観点で熟議を行った。運営委員会の際は、グランドデザインを黒板へ提示して目指す子供の姿を確認できるようにしている。

（参加者）協働センターとのかかわりが特徴となっている。子供たちのボランティア参加は 11 月までに４回あり、地域の方と関わりながら毎回 60 名ほどが参加している。学校運営協議会委員が声掛けをしてくれることでつながりができ、書道や家庭科の補助など集まっていただけるのが、校区の特徴ではないかと感じている。コミュニティ・スクールについてどれだけ職員が理解しているかについて温度差が見られる。委員やボランティアの中には、保護者もいるため、関係性が近く活動場所や個人情報の取り扱いなどに困惑することがある。

グループ３

〇学校運営協議会の取組や、来年度に向けた課題について

（参加者）新型コロナの影響で行事が減少していることも踏まえ、学校運営協議会の開催前に授業参観や学校見学の時間を確保した。協議会では、各学年の目標などを写真とともに紹介するとともにグランドデザインへの取組を紹介し、ご意見をいただいた。学校応援隊（ボランティア）は学校支援コーディネーターが上手にまとめてくれている。隊員募集のチラシ作成やアプリを使った案内などをしてくれており、教育活動の充実に繋がっている。

（参加者）学校運営協議会を設置して２年目である。無理のない範囲でゆっくり立ち上げていこうというスタンスで、３年計画で臨んでいる。２年目である今年度は、主に保

護者に向けての参加・連携の呼びかけに重点を置いている。応援団（ボランティア）に参加してもらえるよう、さくら連絡網を使って案内している。課題として、学校支援コーディネーターがまだ十分に動けていないことが挙げられる。

（参加者）学校運営協議会を設置して２年目である。来年度から制服がブレザーに変わることから、協議会では、子供たちの意見を取り入れながら進めていくうえで、そのことに対するご意見をいただいた。また、ＧＩＧＡスクールに関しては、協議会委員の方の関心も高いため、委員の方に端末の実物を見ていただいた。

（参加者）学校運営協議会を設置して２年目である。学校支援コーディネーターが非常に協力的で、活動案内やプログラムの設定を積極的にしてくれている。参加募集をさくら連絡網でしてくれたり、直接地域の方に声掛けをしてくれたりしていて、学校と地域を繋いでくれている。協議会では前期評価を基に熟議を行った。

（参加者）学校運営協議会を設置して２年目だが、モデル校として２年活動していた。年間４回、協議会を開いており、うち２回は授業の様子を実際に見てもらっている。やりたいこと・担える人材を明らかにして学校支援コーディネーターに伝え、コーディネーターが地域に呼び掛けている。１期目は学校支援コーディネーターがどう動いてよいか分からないところがあったが、２年目から２人に増やしたこともあり、動きがよくなったと感じる。学校支援コーディネーターも仕事をしている方が多いため、委員を含め人材確保が課題だと感じている。

（参加者）学校運営協議会を設置して２年目である。基本的には地域の方を学校に読んでいないが、校長が変わったこともあり、学校の考え方を協議会に知ってもらうことを目的に、協議会の委員の方には参加していただいている。協議会では、保護者アンケートの結果を提示し、ご意見をいただいている。その他、資源物回収の回数を増やせないかという検討も協議会でしていただいている。

（参加者）学校運営協議会を設置して５年目である。コミュニティ・スクールディレクターが協議会の資料はすべて整えてくれている。花壇の草取りなど各行事を行いたいときは、学校支援コーディネーターが応援団（ボランティア）を当たってくれて人材を確保してくれている。また、応援団の管理も担ってくれている。課題として、応援団に登録したが呼ばれないといったご意見への対応がある。年間計画を明らかにして募集するなど工夫が必要だと思っている。

（黒柳委員）学校運営協議会を設置・運営しているうえで良かった点、困った点があれ

ば教えていただきたい。

（参加者）学校支援コーディネーターが担う部分と学校が担う部分の線引きが難しい。

（参加者）教頭の業務量が多い点である。学校運営協議会の運営にあたり、基本的には校務アシスタントがコミュニティ・スクールディレクターとして活動しているが、できる範囲も限られているため教頭が動いているところもある。

（黒柳委員）教頭の業務量は多い。教頭の業務を減らす方向で考えたく、学校運営協議会が新たな負担となってはいけない。学校支援コーディネーターによって熱量が違ったり、地域による温度差を感じたりするようなことはあるか。

（参加者）感じることはある。いずれ積極的に活動してくれる人材の取り合いになるのでは、と思う。

グループ４

〇学校運営協議会の取組や、来年度に向けた課題について

（参加者）コミュニティ・スクール導入２年目である。１年目は、学校における働き方改革をテーマに、教員をサポートするような取組について熟議した。２年目は、働き方改革の視点を取り入れながら、教員と学校運営協議会委員で協議する機会を持ち、必要なことやできることについて話し合った。例えば、給食ボランティアは、配膳等の準備は衛生面で課題があるため、片付けのサポートをしていただくこととした。

（参加者）凧上げ大会が学校の特色となっており、凧を中心として地域とのつながりが強いと感じる。コミュニティ・スクール１年目となる今年度は、凧上げだけではない部分を知ってもらうことからのスタートだったが、学校の目標や行事の意図など学校の運営方針などを共有する良い機会となった。ホームページの発信の仕方は、近隣の小学校を参考にさせていただいた。

（参加者）コミュニティ・スクール導入２年目である。運動会のよりよい実施時期を学校運営協議会で話し合い、良い熟議が生まれた。

（参加者）来年度に向けて、コミュニティ・スクールに対する教員の意識改革に取り組む必要があると感じている。

（参加者）最初から教員の意識が高いわけではなかったが、一緒に取り組んでいくうちに徐々にコミュニティ・スクールがどういうものか実感していくようである。

（参加者）コミュニティ・スクール導入２年目である。コミュニティ・スクールとは何か、からのスタートで、今は教員間で意識の差がある。コミュニティ・スクール担当教員は、他の教員の理解を得ることが課題だが、学校運営協議会委員がやってくれたことが、数値など明確に表れるとわかりやすいと思う。

（参加者）教員と学校運営協議会委員で学校評価について話し合い、重点項目や改善項目に対する取り組みについても意見や提案をいただいた。意見や提案を基に取組を始めたところである。

（参加者）コミュニティ・スクール導入４年目である。学校運営協議会委員から、学校が困っていることについて教えてほしいという意見をきっかけに学習ボランティアの取り組みが始まった。保護者ボランティアは、子供が卒業するといなくなってしまったり、子供の学習に対する得意不得意が保護者の間に伝わってしまったりするため、学校支援コーディネーターが地域のシニアクラブにつないでくれた。学校支援コーディネーターが自治会の集まりに参加し、ボランティアを呼び掛けてくれるなど、学校支援コーディネーターの人選が非常に重要だと感じる。

〇コミュニティ・スクール担当教員としての悩み

（参加者）学校支援コーディネーターが忙しく、コミュニティ・スクール担当教員が窓口になっている。週１日程度学校に常駐してもらえたら、他の教員とも話したり、依頼したりするきっかけになる。

（参加者）本校の学校支援コーディネーターは、小学校６年生の児童の保護者だが、後任予定の方とペアで来校して引継ぎなどしながら、週３～４日程度学校に来てくれるため、声をかけやすい。２人分の学校支援コーディネーター予算はないが、お互いの勤務時間の調整等もしてくれており大変助かっている。学校運営協議会委員は任期が終わると一斉に入れ替わってしまうため、分散して更新されるよう計画的に考えた方が良い。

（参加者）本校の学校支援コーディネーターは、週１回程度の来校だが、依頼ボックスを用意しておいて、各教員が依頼内容をポストしておくと、内容を見て対応してくれる。必要に応じて教員に確認し、教員が想定していた以上の対応をしてくれることもある。校外学習などで地域のお店などに協力を頼む際も、依頼やお礼まで丁寧に対応していた

だけるので、学校負担はほとんどなく、よりよい教育活動につながっていると感じる。

（田中委員）学校運営協議会は、学校評議会とは違うことをもっと教育委員会が伝えていかなければならない。地域の皆さんは、「学校はもっと頼っていいのに」「困っていることを言ってくれたらいいのに」と思っているかもしれないので、学校運営協議会でさまざまな話し合いをして、学校の活動に参加していただけると良いのではないか。今回の協議においても話題となったが、学校運営協議会委員や学校支援コーディネーターの人選は非常に重要になるので、地域人材の確保が今後の課題だと感じた。

グループ５

〇学校運営協議会の取組や、来年度に向けた課題について

（参加者）コミュニティ・スクール導入２年目となり、学校運営協議会会長と学校運営協議会の目的を一緒に見直した。そして、学校運営協議会であがった学校の７つの課題について、次の学校運営協議会時に委員を２つのグループに分け、ＫＪ法で熟議を行った。「７つの課題について思うこと」を付箋に書き出し、画用紙に貼っていき、付箋をもとに、それぞれの考えを発表し、話をふくらませ、グループごとに熟議内容を発表した。まずは、学校運営協議会委員が主体的に学校の課題を知ることが大切であると感じた。地域からは、「学校がんばれ」という意見が多く、学校・家庭・地域の関係性が今とても安定している。今後は、旗振りボランティアの高齢化の課題について、熟議を行っていく予定である。

（参加者）コミュニティ・スクール導入３年目である。教職員にアンケートを実施した結果、学校運営協議会の取組みについて理解が少なかったため、校内に学校運営協議会の取組を紹介するスペース「ひだまり」を設置した。学校運営協議会でやってきたことをポスター等にまとめて掲示したり、「学びのマップ」を作成したりして、地域人材の確保につなげている。今後も学校・家庭・地域の緩やかなつながりを通じて、開かれた学校づくりを目指していきたい。

（参加者）自治会は、学校が職場体験をどうするかという話になった時に、受け入れ先を探してくれたり、部活の地域移行についてのアンケートの全戸配布に協力してくれたりしている。自治会と学校がよい関係であるから、実践できている。

（参加者）コミュニティ・スクール導入１年目なので、まずは学校を知ってもらう。新たな取組についてはこれからとなる。

（参加者）コミュニティ・スクール導入２年目である。昨年度は、学校運営協議会の組織作りをした。２年目となる今年度は、学校運営協議会委員に参観会や運動会等を見ていただき、まずは学校を知り、把握してもらうところから始めている。すぐにできる、短期的な支援（例えば、九九、家庭科の調理実習ボランティア）については実施しているが、長期的な支援はまだ進んでいない。

（鈴木委員）コミュニティ・スクールは、地域も関わっていると言いながら、自治会長は知っているが、地域住民は知らない人が多く、学校のことが地域におりて来ない。

（参加者）コミュニティ・スクール導入４年目となり、学校・地域から見た、学校の強み、弱みを理解し、コミュニティ・スクールとして何ができるのかを熟議している。新たな取り組みとして、学校評価アンケートの開票を学校運営協議会委員と実施した。

（参加者）学校運営協議会委員に授業を参観していただいた後、意見交換をした。また、学校運営協議会の中で話にあがった子供の居場所づくりをテーマとして設定し、熟議を行った。まだ、コミュニティ・スクール導入２年目であるため、学校運営協議会委員からは、学校用語が分からないという意見も聞くため、学校運営協議会時にスライドで説明をすることで、理解を深めた。

（鈴木委員）学校運営協議会委員は、自分でコミュニティ・スクールについて学習するなど、運営に自主的に関与する姿勢が大切だと感じる。

（参加者）コミュニティ・スクールファイルを職員室に置いて情報を共有している。話し合いの議事録やアンケートの結果を綴っている。

（参加者）学校運営協議会委員を引き受けてくれる人は、学校に協力的な人が多い。小学校のほうが、給食、習字支援等、内容的に学校支援ボランティアの要望が多いため、ボランティアを呼びやすいと感じている。中学校は専門的な知識が必要になる。ボランティアについてどうやってネットワークを作ったのか、教えていただきたい。

（参加者）小学校低学年はとにかく人手が欲しいため、ボランティアはとてもありがたい。自信がなかったり、専門的な知識がなかったりしても、まずは、学校に来て学校を知ってもらうことが大切であると感じている。できることから進めていき、ボランティアを増やしていく。

（参加者）小学校の事例を参考に、中学校でのボランティア活動を考えていきたい。

（鈴木委員）現場の先生方にとって、コミュニティ・スクールは負担になっている感じは受けるか。「熟議」という言葉は、もっと分かりやすい違った言葉にしたらどうか。

（参加者）新しい学校に異動になっても、コミュニティ・スクールの仕組みがあると、すでに地域とのつながりができているため、溶け込みやすいメリットを感じている。学校支援コーディネーターの存在も心強い。

■教育長・教育委員所感

（安田委員）学校運営協議会の具体的な進め方に関する意見があり、学校運営協議会がテーマや手法を工夫して進められていることがよくわかった。昼休みの見守り、支援計画、グランドデザインに戻って子供に何ができるかを考えている。コミュニティ・スクールは以前に比べて進んだと感じる。一方で、「地域・保護者との距離の難しさ」という言葉が印象的だった。

（黒柳委員）各学校いろいろな取組を聞き、コミュニティ・スクールが予想以上に進んでいると感じた。一方で、ボランティアの募集など、どこまで学校が担うのかといった役割に対する線引きの難しさを感じた。

（田中委員）コミュニティ・スクールを設置して２年目という学校が多かった。１校４年目の学校があり、経験が多い学校は醸成されていると感じた。今回のグループワークのように学校や教師の間での事例共有は、理解を深める上で価値があると思う。

（鈴木委員）学校と地域を本当の意味で繋げるのは難しいと感じた。「熟議」という言葉は地域と距離をおいてしまうのではと思う。地域のみなさんと「協議」をするという姿勢がよいのではと感じた。

（教育長）各学校の実態にあった熟議が行われていると感じた。熟議の仕方は工夫が必要で、様々な配慮をしなければコミュニティ・スクールは進んでいかないと感じた。「ＣＳでなくてもできるのではないか？」と質問を投げかけてみたが、コミュニティ・スクールの必要性を感じる回答が返ってきた。コミュニティ・スクールを教育委員会の施策として推進してきたが、浸透していると感じた。来年度はすべての学校で協議会が導入される。引き続き積極的な活動を期待する。